

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2470300456		
法人名	社会福祉法人 伊勢湾福祉会		
事業所名	グループホーム マリンの家		
所在地	鈴鹿市中旭が丘1丁目11-8		
自己評価作成日	令和2年 8月 20日	評価結果市町提出日	令和2年12月1日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報公表システムページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaizokensaku.mhlw.go.jp/24/index.php?action=kouhyou_detail_022_kihon=true&JizyosvoCd=2470300456-00&ServiceCd=320
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人 三重県社会福祉協議会
所在地	津市桜橋2丁目131
訪問調査日	令和 2年 10月 7日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

入居者一人ひとりの意志を尊重し、個々のペースに合わせて、むやみに行動を制限するのではなく、見守りを強化していく。問題点があれば職員間で話し合い、支援策を工夫していく。優しい言葉がけに努め、傾聴し、共感する態度で本人の現実を受け止め、受け入れる態度で接していくようにしている。職員間では普段からコミュニケーションが取りやすい人間関係を保ち、会議や毎日の申し送り時に意見交換したり、連絡帳の活用で、情報の共有に努め、統一したケアができるように心がけている。またホーム全体が家庭的な雰囲気でも和やかに過ごせる空間づくりに努めている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

この事業所では、本年になって理念を職員全員で検討し直した。その結果、「一人一人の尊厳を守り、その人らしく安心」できる“生活の場”をつくり、「家族や地域と交流」する「家庭的雰囲気づくり」を目指している。そして利用者の意思を尊重し、むやみに行動制限をせず、上から目線ではなく傾聴と共感で本人を受け入れ、利用者にしてもらえることを支援しようとしている。また職員はこうした取り組みに向けて、職員間でもよく話し合い、研修に励み、仲のいい職場づくりがされている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	今年度に入り、理念を見直しました。職員から意見を聞き、どんな気持ちで介護という仕事に向き合っているのか？会議の場で話し合い、思いを共有して、決定した。	これまでの理念を全職員の意見交換で改定し、必ず目に付く場所に張り出している。職員には、基本的な態度・気持を共有し、忘れがちな時に言葉にするよう伝えている。時には職員もイライラする時もあり、理念を思い出してもらうようにしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	自治会に加入している。広報も毎回届けてもらっている。地域の行事にも参加している。今年に入り、感染症拡大防止のため地域の行事も中止になり、交流が途絶えているが、夏休みのラジオ体操を3密をさけて当ホームの駐車場で実施しました。	コロナのため外出や交流自体ができないが、夏休みは子どものラジオ体操のみ事業所前で行った。以前は事業所会議室を自治会に開放し、防災訓練を自治会と共に行っており、駐車場の隅に地域の防災倉庫がある。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	事業所2階の多目的室を地域の集いや、介護予防事業に使用するために開放している。常時、見学も受け入れており、認知症の方々が、明るく笑顔で生活している様子などを知っていただけるようにしている。地域の介護に関するお困りごとなどの相談も受け付けている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2か月に1回の開催で当ホームの現況報告をし、出席者の方々の要望や助言をいただいている。また、旭が丘調剤薬局の方が出席され、お薬に関しての知識やアドバイスをいただいている。	奇数月に開催するが、本年3月、5月は中止、書類を参加者に送付した。集まれば活発な意見交換がされている。家族も参加するが限られており、参加する関係者も限られているので、より多くの参加呼びかけに悩んでいる。	調剤薬局が参加する等の工夫がされている。今後、より多くの参加を得るには、参加者の固定化・限定ではなくテーマに応じて、医師・警察・消防等に働きかけるよう期待する。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	鈴鹿・亀山地区広域連合の職員にも年6回の運営推進会議に出席していただき意見や情報交換をおこなっている。介護保険関係の事や運営に関することも相談している。また、いきいきボランティアの活動などの受け入れをし、年1回の意見交換会にも参加している。	広域連合の担当とは顔馴染みになっている。運営上の相談事等があれば気軽に出かけている。経理事務や管理運営上のことは法人本部が対応している。いきいきボランティアについては市社協と意見調整している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	法人全体で月1回開催している身体拘束廃止委員会へ担当職員が出席している。県や市で行われる身体拘束に対する研修にも参加し、意識を高め、職員に伝達研修を行っている。特にスピーチロックに関しては職員間で注意しあい、不適切な行為や言動がないか、会議や申し送り等で話し合っている。	今は身体拘束を要する事例はない。以前インフルエンザに罹った際には、治療まで部屋に留め置いたが、家族には了解を得ている。日常支援中について言葉が荒くなったり、「待つて」と言いがちなので、言葉に注意している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	毎月1回の拘束委員会にて虐待防止についても勉強会を行っている。入居者の尊厳を守る気持ちをもって対応できるように職員間で話し合い、虐待につながりかねない行為がないか、業務を振り返る時間を設けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現実、権利擁護に直接関与することがなく、職員も意識が薄いように思います。今後は様々な事例を元に勉強会の機会を作り学んで行こうと思っている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時に利用者本人・家族へ利用契約書及び重要事項説明書等の項目について説明をし、ご理解、納得を得て同意をいただいている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族会や運営推進会議にご出席いただき意見や要望を伺えるようにしている。また、面会時には直接お話を聞いた内容は法人幹部へも報告し、今後の運営に反映できるようにしている。	家族会は2カ月毎にしたり、本部のイベントを家族に案内したが出席は少なかった。利用料支払いで家族来訪の機会はある、その都度意見交換している。今は家族も遠慮して来訪が少なく、かえって利用者がとまどっている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	法人幹部職員や管理者が職員とのコミュニケーションを図ることができるように、「マリンホームを良くする会」を開催している。毎回、職員の意見や提案を聞く機会を設けている。	月1回、職員会議をしており、本部で行う各委員会に担当職員が出席している。いずれも活発な意見交換で、改善要望があれば書類を整えて本部に提出、状況に応じて実現させている。この自己評価表は職員と話し合い作成した。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	半年に一度、全職員に対して基礎評価表（自己評価）をチェックして提出することによって、各自の向上心が持てる。それを元に管理者も個人評価ができる。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員一人ひとりの実際と力量にあった法人内外の研修に参加している。また、資格取得や実践研修等の法人としてのサポートも行っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	同法人内のグループホームで月1回のグループ会議の場を設け、意見・情報交換や新しい取り組みに向けた活動をしている。他の施設が主催している勉強会にも積極的に参加し職員の資質向上への取り組みをしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	施設見学、入所申し込みの時点で本人の現在の生活に対する要望などをお聞きして会話を重ね、安心感を持ってもらえるように努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	施設見学、入居申し込みの時点で、家族としての介護に対する困りごとや施設入居に関しての不安感などしっかりと聞き入れ会話を持って関係づくりに努める。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人・家族の意向を確認しそれに対し当事業所のできる事を伝え、在宅のケアマネジャーとも情報を共有しながら、本人・家族にとって良い支援策を共に考え提案していく。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	理念の基に安心できる環境で、安心できる職員と共に生きる生活の場として、寄り添う介護に心がけて、人生の先輩から学んだり、励ましあったりと良い関係を築いていけるように努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	面会時には本人の日常の様子や思いを伝え、家族の意向を伺ったりしてコミュニケーションを図るようにしている。また、体調の変化や生活上の報告事項があれば必ず報告している。最近では感染症拡大防止のため思うように面会ができません。オンライン面会もできる様に取り組んでいる。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	馴染みの場所へ出掛けることは困難ですが、併設のデイサービスに親戚や知り合いが利用しているとこちらから会いに行ったり来ていただいたりして、馴染みの関係を継続できる様に支援している。	もともと馴染みの関係を持つ人が少ないが、馴染みの場へ行けていない。これまでは家族が故郷や生家へ連れて行ったが、今は外出困難な上、出かける元気が少なくなっている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者一人ひとり、今まで過ごしてきた生活環境の違いや性格の違いを把握して、相性の合う方、合わない方を配慮しながら職員が関わりを持ちスムーズなコミュニケーションが取れる様に支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院や施設変更により、退居になることがあっても、本人・家族の思いをくみとり、環境の変化等の不安感を取り除ける様に各関係機関との連携を図り、今後の生活を安心して過ごしていけるように支援している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	会話の機会を増やすことで入居者の今の思いに気づき、希望や意向を把握して、安心できる生活を送ってもらえるように寄り添う介護に努めている。意思疎通の困難な場合には家族を交えて、本人の生活歴などを元に思いに気づけるように努めている。	会話がよくなっており、利用者の気持をよく把握している。耳が遠い人には、筆談やジェスチャーで話す。家族も職員もつい声が大きくなってしまいう事もある。利用者・職員ともに男女関わりなく打ち解けている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ご本人からはなかなか生活歴や今までの暮らし方を積極的に話されない。レクの時間を使って、昔話をしたり、回想法で生活歴を聞き出したりすることもある。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎日の体調管理や観察をしっかりと行うように努め、個々の生活パターンを把握して職員間で常に情報を共有し、統一したケアに心がけている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	定期的に、日常生活における課題や必要なケアについて、職員全員にアセスメント及びケアの方法等を書面で提出してもらい、それに基づいて検討することもある。家族の意見や意向も確認し、本人にとって意欲的に生活できるような計画を作成できるように努めている。	職員会議でカンファレンスをしているが、申し送りでもよく意見が出る。モニタリングは3か月毎に行い、ケアプランに反映させている。アセスメントはプラン更新時に作成するが、その記録は職員が交代で記入している。ケアマネジャーは法人内ホーム2か所兼務で多忙である。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	毎日の記録管理は24時間シート及びデータ入力によって職員間で情報の共有をしている。また、日々変化する毎日の状況はケース記録、連絡帳や申し送り時に報告、相談しながら、介護計画にも反映している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	今年に入り、新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため施設での入居者の生活も一変している。家族の面会規制やボランティアの来訪もない。施設内でいかに楽しく、いきいきと生活できるか？職員も日々工夫している。今後はオンライン面会やICTを活用した新しい環境整備に取り組んでいく。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	ボランティアの来訪や小学生のワークキャンプの受け入れ、または地域の行事にも参加して交流を深め、施設への理解も得られている。今年に入り感染症の拡大により、外出もできず、交流が途絶えていることに、不安が増している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居時に、当ホームの協力医との連携について説明し、本人・家族の意向を確認し、納得が得られるかかりつけ医を決定するようにしている。協力医には月2回の往診と緊急時には報告してすぐに指示を受けられる体制をとっている。受診は基本は家族付き添いであるが、緊急時には職員で受診支援することがある。	協力医は毎月2回往診しており、利用者全員が受診している。薬は調剤薬局から届いている。急変時は職員が対応するが、救急車は協力医が要請する。整形外科・皮膚科・婦人科・歯科等専門医の通院は家族が対応している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護職の配置はなく、併設のデイサービスや同一法人、特養の看護師に相談や指導を受けている。主治医とはかかりつけ医の看護師を通じ、24時間体制で連絡可能で、急変時には往診にきてもらっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入退院時には病院関係者との情報交換に努め、早期の退院や退院後の安定した生活が送れるように本人・家族と相談しながら、本人にとって、安心した生活が送れるように支援している。また、日頃から、病院のソーシャルワーカーとも施設の空き情報等の連絡も取りあっている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域との関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化した場合における対応および看取りの指針として当ホームが出来る事を入居時に説明している。実際にその様な状況になったときには同意書を提出していただくことになっている。主治医、家族との連携を図り、可能な限り本人の意思を尊重し、職員間で統一したケアに取り組んでいる。	もともと看取りの予定はなかったが、昨年・一昨年に看取りを経験しマニュアルを策定した。看取り時期をいつにするか協力医は慎重に判断するが、事業所では家族に終末間近になった、といつ連絡するか悩んでいる。職員側の負担感も考慮し、自然に衰えて食べないことを配慮して支援している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時対応マニュアルの周知に努めているが、実際には全職員の実践力にはつながっていない。定期的な訓練を繰り返して、不安なく、対応できるように備えていきたい。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	法人全体での2か月に一回の防災委員会で対策会議や災害訓練を行い、各事業所から参加している。また、併設しているデイサービスとの合同訓練や当事業所での夜勤帯・日勤帯を想定した避難訓練の実施。地域の防災訓練にも参加して協力体制を築いている。	総合訓練は本部主体のため、事業所は毎年日勤帯1回、夜勤帯1回の独自訓練をしている。通報・連絡・避難訓練をし、救命救急は消防学校へ職員交代で参加する。水害の恐れがあり食品等の備蓄をしており、市が事業所を2次避難所になっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入居者1人ひとりの性格、暮らしてきた環境の違いを把握して、本人の意思を尊重した声掛けを心がけている。	人それぞれの違いを考慮して支援しているが、利用者の意思を確認に苦勞することがある。また職員が慣れすぎて無遠慮にならないよう注意している。トイレ誘導は大っぴらにならないよう気を付けている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日頃から家族のように接し、本人の思いや希望を素直に言えるような職員との関係作りに努めている。意思疎通の困難な方でも表情やしぐさから本人の意思をくみ取り、自己決定に繋げられるように働きかけている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	施設として決められた日課があるが、1人ひとりの体調に合わせて無理強いせず、個々のペースに合わせたケアを心がけている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	入浴前には本人に着替えを選んでもらったり、男性入居者には自分で髭剃りをするように促して清潔に尚且つおしゃれに過ごせるように支援している。3か月に1回は理容のボランティアさんにカットをお願いしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	現在は食事の準備や片付けを一緒にすることはできていないが、朝から昼食の献立を話題にして楽しみのひとつとしている。食事形態でも個人に合わせて変えたり、麺の嫌いな方には代替品を提供したりしている。旬の食材で季節感を味わっていただいたり、ときにはおやつ作りで盛り上がることもある。	昼食と夕食及び行事食は本部で調理し、事業所で温めたり、刻み食づくりをしている。朝食とご飯炊き、おやつ作りは事業所でしている。事業所の炊事場は職員が交代で作業している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事・水分摂取量は毎日記録管理している。体調の変化があるときには主治医へ報告するようにしている。摂取量の少ない時には、好みの物を提供し美味しく召し上がっていただけるように支援している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、一人ひとりに、声掛けし、誘導。個々に合わせた介助方法で支援している。義歯の方は夕食後に洗浄剤に浸けて朝まで預かるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄の失敗を減らせるように、定期的な声掛けで誘導している。訴え時にもその都度誘導し、行動や表情の変化に気づき、本人の排泄パターンも把握して、タイミングを見逃さないように誘導している。夜間はコールに対応したり、声掛けしたりしている。	排泄チェック表と本人の様子を観察し、トイレ誘導している。自立者は2名、他はリハビリパンツを使用し、夜間のみおむつ使用が2名いる。便秘が多く、食事を配慮、肛門マッサージしたり、時には下剤服用をしてもらう。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便チェック表があり、一人ひとりの排泄のパターンを把握して、なるべく、毎日スムーズに排便があるように支援している。食べ物で工夫し、毎日バナナを食べる方やヨーグルトを食べる方、また、体調に合わせた運動をしたりしているが、便秘症の方には下剤の服用でコントロールしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	週2回の入浴の確保はできている。本人の拒否がある場合には声掛けに工夫したり、時間を置いてから再度声掛けしているが、無理強いはないようにしている。男性職員に対しての拒否には女性職員で対応している。	午前午後2人ずつ交代で入浴(土日関係なし)している。入浴嫌が多いので、働きかけをいろいろ工夫して、時間かけて入浴するようにしている。時には入浴剤を使用している。入浴介助の負担があるため、浴室改善の計画が進められている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中はなるべく活動的に過ごしていただきたいが、本人の生活のリズムに合わせて思い思いに過ごせるように支援している。夜間も本人のペースがあり、個々の就寝時間に合わせて介助している。寝具は清潔に保ち、季節に合った寝具を適切に用い、空調管理も整えている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬剤情報は全職員が確認できるように個人ファイルに保管している。投薬の変更や中止、追加等はその都度連絡帳及び申し送り時に伝えている。服薬介助も誤薬防止のため、必ず二人以上で目視している。体調の変化があれば主治医へ報告し、指示を仰いでいる。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	洗濯やタオルたたみなど、無理強いせず、出来る事は積極的に手伝っていただく。脳トレや塗り絵、折り紙等毎日の日課にして、ファイルを作り保管して、いつでも見れるようにしている。ティータイムでは好きな飲み物、個人的に毎日飲みたいものなど好みに合わせて召し上がっている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	毎年、季節ごとの行事で桜や菖蒲、紅葉などの見物を楽しみにしているが、今年は梅見物の後、感染症が拡大したため外出が禁止になり、張り合いのない生活になっている。ホームの周りの花壇をみたりして気分転換を図る程度になっている。家族との面会規制もあり、不自由な生活になっている。	以前は散歩やドライブ等に出掛けたが、今はコロナウィルスのため外出できず、庭の花壇を見るぐらいしかできない。内部のレクリエーションや手芸品作りには工夫して職員が交代で働きかけ、楽しんでいる。利用者の多くは自然の中に出ることに興味を持っている。	感染予防上、安易に外出できず苦勞しており、利用者も外部との関わりを望んでいるようなので、時期に応じた外との触れ合い方にもう一工夫が望まれる。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	基本的に本人がお金を所持することはしていない。希望時には事業所で家族から預かっているおこずかいから出金して使えるようにしている。本人が自分のお金や通帳を気にすることもあるが、家族が管理していることを説明すると納得される。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族や親せきからの電話があれば、必要に応じて取り次ぎ、話をしてもらうようにしている。行事の一環として手紙を書いて家族へ送ることもある。コロナ禍の中、家族からの手紙も届いている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	日中はカーテンで日差しを調整したり、空調をこまめに調整して、高齢の入居者の体感に合わせている。感染症対策として換気もこまめに行っている。季節ごとの壁面飾りを入居者と職員で作成して飾ったり、時にはホームの花壇で育てた花や家族が届けてくれた花を飾り、明るい雰囲気を作るように努めている。	昼間は皆が食堂兼ホールに出てきて一緒に過ごしている。出てくれば、ぬり絵・脳トレ・手芸品作り・足湯等を楽しんでいる。利用者が重度化している影響もあり、できることが限られてきた。花壇を見ても手入れには興味を示さなくなってきた。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	自分なりに居心地の良い場所があり、本人の希望に合わせソファでくつろぐ方や自室で少し休まれる方、テーブルで物づくりしたり、脳トレや塗り絵に取り組んだりと思い思いに自由に過ごしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室には家族の写真や本人が大事にしていた品物を飾って、思い出を大切にしている。家族の面会時にはゆっくりと過ごせるように、居室の掃除や担当者が本人と共に整理整頓をするなどして居心地の良い空間作りに努めている。	部屋のベッド・エアコン・クローゼットは事業所で設置している。センサーマット利用者は5名いる。それぞれ好みの品を持ち込んでいるが、部屋の大きさを考慮し、収まる範囲に絞られる。今は仏壇持ち込みの人はいない。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	シルバーカーを押す方や車いすを自走する方の移動時には安全確保のために環境整備に配慮して室内を自由に移動できるように自立支援のひとつとしている。		